

佐賀市 33 歴史探訪

見島のカセドリ行事

「ザッザッザッザッ、ザッザッザッザッ……」
かせどりが打ち鳴らす力強い竹の音。鳥の飛び立つ勇ましい羽音にも似た、この迫力のある打音が静かな夜の見島に響きます。

今回は、佐賀市蓮池町見島の集落に伝わる小正月の民俗行事をご紹介します。

この行事、現在は毎年2月の第2土曜日の夜に行われていますが、以前は2月14日(旧暦1月14日)に行われていました。

入念な準備を経て、当日は午後7時頃から熊野神社にて始まります。行事の主役は、^{みの}蓑・笠を身にまとい、顔には白手拭いを巻き、手には先端半分を細かく割った長さ1.7mの青竹を持った「かせどり(加勢鳥)」と呼ばれる青年2名です。まず、雄雌の「かせどり」は鳥居から拝殿に走り込みます。両膝を付き、体を前にかがめて竹を床面に小刻みに激しく打ち鳴らしながら、盃に注がれた酒をそのままの姿勢で飲み干し、また同じ所作を続けます。謡のあと最後の所作が終わると、竹を打ち鳴らしながら鳥居へ駆け戻ります。

神社での行事が終わると、かせどり2名に加え、^{ちようちん}提灯持ち2名、^{てんぐ}天狗持ち2名、^{ごへい}御幣持ち1名、^{かごにな}籠担い数名で集落内の各家庭(氏子)を回ります。神社での所作と同じようにかせどりは家々に飛び込んで竹を激しく打ち鳴らし、出された茶や酒を飲み干して走り去りその後には籠担いがお祝儀をもらい受けます。すべての氏子を回り終えると熊野神社に集まり皆で飲食しながら歓談し、行事は終わるのです。

さて、このカセドリ行事の由米については明確な資料が残っておらずはっきりしません。蓮池鍋島家初代藩主鍋島^{なおずみ}直澄が、紀伊の熊野三所権現から分霊を受けて、今の場所に熊野神社を建立した後、寛永年間(1624~1644年)ごろから続いていると地元では伝えられています。

小正月の夜に、家々の門戸を訪れて音響を鳴らすというような習俗は全国にあり、例えば東北地方の「ナマハゲ」もこれに類するものです。見島では、訪れる神「かせどり」が打ち鳴らす音によって^{やく}厄をはらい、その一年の幸福を期待したものと考えられ、県内には他に伝承されていない「^{しん}神人訪問」の伝統行事として非常に価値の高いもので、平成15年に国の重要無形民俗文化財に指定されています。一度ご覧になってはいかがでしょうか。



▲カセドリ行事の始まり



▲拝殿でのカセドリ行事



一口メモ

見島の集落より西方の蓮池町西名には宗眼寺があります。曹洞宗寺院で、佐賀支藩蓮池鍋島家の菩提寺です。初代藩主直澄の霊屋にある「木造河童像」は佐賀市重要有形民俗文化財に指定されています。

